

鵲狩

泉鏡花

青空文庫

はつふゆ よふけ
初冬の夜更である。

かたやまづ
片山津（加賀）の温泉宿、半月館弓野屋の二階——だけれど、

はしごだん
広い階子段が途中で一段大きくうねってS形に昇るので三階ぐら

いに高い——とツつき ドア取着的扉を開けて、一人旅の、三十ばかりの客が、

ねまき
寝衣で薄ぼんやりとあらわれた。

この、半ば西洋づくりの構は、かまえ日本間が二室で、四角な縁が、

名にしおうこの名所、三湖の雄なる柴山しばやま瀉がたを見晴しの露台の

あつらえ
眺ゆえ、がらすど硝子戸と二重を隔ててはいるけれど、霜置く月の冷たさ

が、びようびよう 渺々たる水面から、おのず 自から沁徹る。しみとお ……

いま偶と寢覚ふの枕を上げると、電燈は薄暗し、硝子戸を貫いて、障子にその水の影さえ映るばかりに見えたので、

「おお、寒い。」

えり 頸から寒くなつて起きて出た。が、寝ぬくもりの冷めないうち、かわや 早く厠へと思う急せきごころ 心に、向う見ずに扉ドアを押した。

押して出ると、不意に凄すこい音で刎返はねかえした。ドーンと扉の閉るのが、広い旅館のがらんとした大天井から地の底まで、もつての外に響いたのである。

一つ、大きなもの音のしたあとは、目の前の階子段も深い穴のように見えて、白い灯も霜を敷いた状さまに床に寂しい。木目の節の、

点々ぼつぼつ黒いのも鼠の足跡かと思われる。

まことに、この大旅館はがらんとしていた。——宵に受持の女中に聞くと、ひきつづき二十日はつか余りの間団体観光の客が立てつけて毎日百人近く込合つたそうである。そこへ女中がやつと四人ぐらいだから、もし昨日きのうにもおいでだと、どんなにお気の毒であつたか知れない。すっかり潮のように引いたあとで、今日はまた不思議にお客が少く、此室ここに貴方あなたと、離室はなれの茶室をお好みで、御隠居様御夫婦のお泊りがあるばかり、よい処で、よい折から——と言つた癖に……客が膳ぜんの上の猪口ちよくをちよつと控えて、それはお前さんたちさぞ疲れたろう、大掃除の後の骨休め、という処だ。こゝは構わないで、湯にでも入つたら可よかろうと、湯治の客には妙

にそぐわなない世辞を言うことばつと、言に随いて、ではそうさして頂きます、後生ですわ、と膠にべもなく引退ひきさがつた。畳も急に暗くなつて、客は胴震いをしたあとを呆氣あつけに取られた。

……思えば、それも便宜たよりない。……

さて下りる階子段は、一曲り曲る処で、一度ぱつと明るく広くなつただけに、下を覗のぞくとなお寂しい。壁も柱もまだ新しく、隙す間きまとてもないのに、薄い霧のようなものが、すつと這入はいつては、そつと爪つまさき尖なを嘗めるので、変にスリツパが這すべりそううで、足許あしもとが覚束おぼつかない。

渠かれは壁かまに搦つかつた。

てのひら
掌てのひらがその壁の面に触れると、遠くで湯しづくの雫しづくの音がした。

聞き澄すと、潟の水の、汀の蘆間をひたひたと音訪れる氣勢もする。……風は死んだのに、遠くなり、近くなり、汽車が飮するように、ゴーと響くのは海鳴である。

更に遠く来た旅を知りつつ、沈むばかりに階段を下切った。

どこにも座敷がない、あつても泊客のないことを知った長廊下の、底冷のする板敷を、影の徜徉のように、我ながら朦朧として辿ると……

「ああ、この音だった。」

汀の蘆に波の寄ると思つたのが、近々と聞える処に、洗面所のあつたのを心着いた。

機械口が緩んだままで、水が点滴しているらしい。

その袖壁の折角おれかどから、何心なく中を覗くと、

「あッ。」と、思わず声を立てて、ばたばたと後あとへ退さがった。

雪のような女が居て、姿見に真ま蒼さおな顔が映った。

温泉いでのゆの宿の真夜中である。

二

客は、なまじ自分の他ほかに、離室はなれに老人夫婦ばかりと聞いただけに、廊下でいきなり、女の顔の白鷺しらさぎに擦違すりかったように吃驚びっくりした。

が、雪のようなのは、白い頸くびだ。……背後うしろむきで、姿見に向つ

たのに相違ない。燈ひの消えたその洗面所のまわり囲が暗いから、肩も腰も見えなかったのであろう、と、疑うたがの幽霊を消しながら、やつぱり悚然ぞつとして立淀たちよどんだ。

洗面所の壁のその柱へ、袖の陰うつつが薄りと、立縞たてしまの縞目が映ると、片頬かたほで白くさし覗いて、

「お手水ちようず……」

と、ものを忍んだように言った。優しい柔かな声が、思いなしか、ちらちらと雪の降りかかるようで、再び悚然ぞつとして息を引く。
……

「どうぞ、こちらへ。」

と言った時は——もう怪しいものではなかった——紅鼻緒の草

履に、白い爪さきも見えつつ、廊下を導いてくれるのであろう。
 小褌こづまを取った手に、黒縹くろしゆす子の襟が緩い。胸が少しはだかつて、
 褌を引揚げたなりに乱れて、こぼれた浅葱あさぎが長く絡からまった、ぼつと
 りものの中肉が、帯もないのに、嬌しなやか娜である。

「いや知っています。」

これで安心して、衝つと寄りざまに、斜ななめに向うへ離れる時、いま
 見たのは、この女の魂だったろう、と思うほど、姿も艶えんに判はつきり然
 して、薄化粧した香さえ薫る。湯上りの湯のにおいも可なつかし懐いま
 で、ほんのり人肌が、空くうに来て絡まつわった。

階段を這はった薄い霧も、この女の気を分けた幽かすかな湯の煙であつ
 たろうと、踏んだのは惜おしい気がする。

「何だろう、ここの女中とは思うが、すばらしい中年増だ。」
 手を洗つて、ガタン、トンと、土間穿どまばきの庭下駄を引摺る時、閉
 めて出た障子が廊下からすツと開あいたので、客はもう一度ハツと
 した。

と小がくれて、その中年増がそこに立つ。

「これは憚り……」

「いいえ。」

と、もう縞の小袖をしゃんと端折はしよつて、昼夜帯を引掛ひっかけに結ん
 だが、紅あかい扱帯しごきのどこかが漆の葉のように、紅くれなにちらめくばかり。
 もの静しずかな、ひとがらな、おつとりした、顔も下ぶくれで、一重ひとえま
 瞼ぶたの、すつと涼しいのが、ぽつと湯に染まって、眉の優しい、

容子のいい女で、色はただ雪をあざむく。

「しかし、驚きましたよ、まったくの処驚きましたよ。」

と、懐中ふところに突込つっこんで来た、手巾ハンケチで手を拭ふくのを見て、

「あれ、貴方あなた……お手拭てぬぐいをと思いましたが、唯ただいま今お湯へ

入りました、私のだものですから。——それに濡れてはおりません……」

「それは……そいつは是非拝借しましょう。貸して下さい。」

「でも、貴方。」

「いや、結構、是非願います。」

と、うっかりらしく手に持った女の濡手拭を、引手ひったく繰るよう
ぐいと取った。

「まあ。」

「ばけものをする事だと思つて下さい。丑満時うしみつどきで、刻限が刻限だから。」

ほぼその人がらも分つたので、遠慮なしに、半調戯なかばらかうように、手どころか、するすると面おもてを拭いた。湯のぬくもりがまだ残る、木綿も女の膚はだ馴なれて、柔やわかに滑なめかである。

「あれ、お気味が悪うございましたように。」

と釣込まれたように、片袖を頬に当てて、取戻そうと差出す手から、ついと、あとじさりに離れた客は、手拭を人質のごとく、しかと取つて、

「気味の悪かつたのは只今でしたな——この夜ふけに、しかも、

ここから、唐突だしぬけだろう。」

そのまま洗面所へ肩を入れて、

「思いも寄らない——それに、余り美しい綺麗きれいな人なんだから。」

声が天井へもつき通して、廊下へも響くように思われたので、急に、ひっそりと声の調子を沈めた。

「ほんとうに胆きもが潰つぶれたね。今思ってもぞツとする……別嬪べっぴんな

のと、不意討で……」

「お巧じょうず言いばつかり。」

と、少し身を寄せたが、さしうつむく。

「串じょうだん戯ごじゃありません。……（お手水……）の時のごときは、

頭から霜を浴びて湯の底へ引込まれるかと思つたのさ。」

おおげさ
大袈裟に聞えたが。……

「何とも申訳がありません。——時ならない時分に、髪を結つたりなんかしましたものですから。——あの、実は、今しがた、遠方のお客様から電報が入りまして、この三時十分に動いぶりばし橋へ着きます汽車で、当方へおいでになるツて事だものですから、あとは皆年下みんなの女たちが疲れて寝ていますし……私がお世話を申上げますので。あの、久しぶりで宵に髪を洗いましたものですから、ちよつと束ねておりました処なんでございますよ。」

いまは櫛くしまき卷つやつやが艶々しく、すなおな髪髪のふつさりしたのに、顔がやつれてさえ見えるほどである。

「女中おんな部屋でいたせばようございますのに、床も枕も一杯になつ

て寝ているものでございますから、つい、一風呂頂きましたあとを、お客様のお使いになります処を拝借をいたしまして、よる夜中だと申すのに。……変化おぼけでございますわね——ほんとうに。」
と鬢びんに手を触つたまままた俯うつむ向く。

「何、温泉宿の夜中に、寂しい廊下で出で会くわすのは、そんなお化に限るんだけど、何てたつて驚きましたよ——馬鹿々々しいほど驚いたぜ。」

言うまでもなく、女中と分つて、ものいいぶりも遠慮なしに、「いまだに、胸がどきどきするね。」

と、どうした料りょうけん簡けんだか、ありあわせた籐とういす椅子いすに、ぐつたりとなつて肱ひじをもたせる。

「あなた、お寒くはございませんの。」

「今度は赫々かつかとほてるんだがね。——腰が抜けて立てません。」

「まあ……」

三

「お澄さん……私は見事に強請ねだったね。——強請ねだったより強請ゆすりだよ。いや、この時刻だから強盜わざの所業ありがたです。しかし難有ありがたい。」

と、枕はだけ匆はねた寢床ねどの前まへで、盆ひらの上うへながらその女中にようぢゆう——お澄——に酌しやくをしてもらって、怪けしからず恐悦おそえつしている。

客きやくは、手てを曳ひいてくれないでは、腰こしが抜ぬけて二階にがいへは上あれない

と、串じょうだん戲ごを真顔で強いると、ちよつと微笑ほほえみながら、それでも心しんから氣きの毒どくそうに、否いやとも言わず、肩かたを並べて、階はしご子ご段だんを——上あがると蜿うねりしなの寂さびしい白い燈ひに、顔かほがまた白く、褌つまが青かつた。客きやくは、機き会かいのこんな事ことは人ひと間ま一いつ生せいの旅りょ行ぎやうのううちに、幾いくた度たびもあるものではない。辻つじ堂だうの中なかで三さん々ざう九く度どの杯はいをするように一いつ杯はい飲のもう、と言いつた。——酒しゆは、宵よの、膳ぜんの三さん本ほんめめの銚ちやうし子しが、給ぢ仕しは遁にげたし、一いつ人にんでは詰つまらないから、寢ねしなに呷あおろうと思おもつて、それにも及およばず、ぐぐつつすり寐ね込んだこのが、そのまま袋ふくろ戸こ棚たなの上うへに忍しのばしてある事ことを思おもい出でしたし、……またまたそうも言いつた。——お澄すみが念ねんのため時とき間かんを訊きいた時とき、懷わい中ちゆう時じ計けいは二に時じ半はんに少まし間まがあつた。

「では、——ちよつと、……掃除番の目ざとい爺やが一人起きま
 したから、それに言つて、心得さす事がありますから。」と軽く
 柔やわらかにすり抜けて、扉ひらきの口から引返す。……客に接しては、草履を
 穿はかない素足は、水のように、段の中途でもう消える。……宵に
 鯊はぜを釣落した苦き経験のある男が、今度は鱸すずきを水際で遁にがした。あ
 たかもその影を追うごとく、障子を開けて硝子戸がらすどし越こしに湖うみを覗のぞいた。
 連つらなり亘わたる山々の薄墨の影の消えそうなのが、霧の中に縁へりを繞めぐら
 す、湖うみは、一面の大なる銀盤おおいである。その白銀しろがねを磨いた布目ば
 かりの浪もない。目の下の汀みぎわなる枯蘆かれあしに、縦横に霜を置いたの
 が、天心の月に咲いた青い珊瑚珠さんごじゆのように見えて、その中から、
 瑪瑙めのうの棧さんに似て、長く水面はるかを遙に渡るのは別館の長廊下で、棟に

欄干を繞めぐらした月の色と、露の光をうけるための台うてなのような建ものが、中空にも立てば、水にも映る。そこに鎖とぎした雨戸々々が透通つて、淡く黄を帯びたのは人なき燈ともしびのもれるのであろう。

鐘の音ねも聞えない。

潟、この湖の幅の最も広く、山の形の最も遠いあたりに、ただ一つ黒い点が浮いて見える。船か雁かりか、※かいつぶりか、ふとそれが月影に浮ぶお澄の、眉の下の黒子ほくろに似ていた。

冷える、冷い……女に遁げられた男はすぐに一すくみに寒くなつた。一人で、蟻ありが冬ふゆごもり籠かごに貯えたような件くだんのその一銚ひとちようし子。

——誰に習つていつ覚えた遺やりくり線せんだか、小皿の小鳥に紙を蔽おほうて、煽あおつて散らないように杉すぎばし箸ばしをおもしに置いたのを取り出して、自や

棄けに茶碗で呷あつた処へ——あの、登あしおと音は——お澄が来た。「何
 もございませぬけれど、」と、いや、それどころか、瓜うりの奈良漬。
 「山家やまがですわね。」と胡桃くるみの砂糖煮。台だいじゆう十能に火を持って来た
 のを、ここの火鉢と、もう一つ。……段の上り口の傍わきに、水屋の
 ような三畳があつて、瓶掛びんかけ、茶道具の類が置いてある。その
 火鉢とへ、取分けた。それから隣座敷へ運ぶのだそうで、床の間
 の壁裏が、その隣座敷。——「旦那様の前ですけど、この二室ふたまが
 取つて置きの上等」で、電報の客というのが、追つてそこへ通る
 のだそうである。——
 「まあお一杯ひとつ。……お銚子が冷めますから、ここでお燗かんを。ぶし
 つけですけれど、途中が遠うございますから、おかわりの分も、」

と銚子を二本。行届いた小取まわしで、大びけすぎの小酒こざかもり。

北の海なる海うみなり鳴の鐘に似て凍る時、音に聞く……安宅あたくの関は、

この辺あたりから海上三里、弁慶がどうしたと？ 石川県能美郡片山のみごおり

津の、直なおさむらい侍とは、こんなものかと、客は広袖びとてらの襟を撫なでて、

胡坐あぐらで納まったものであつた。

「だけど……お澄さんあともう十五分か、二十分で隣座敷となりへ行つ

てしまわれるんだと思うと、情なさけない気がするね。」

「いいえ。——まあ、お重ねなさいまし、すぐにまたまいります

。」

「何、あつちで放すものかね。——電報一本で、遠くから魔術の

ように、旅館の戸をがらがらと開けさせて、お澄さんに、夜中

に湯をつかわせて、髪を結わせて、薄化粧で待たせるほどの大したお客なんだから。」

「まあ、……だって貴方、さばき髪でお迎えは出来ないではございませんか。——それに、手順で私が承りましたばかりですもの。何も私に用があつていらつしやるのではありません。唯今は、ちようど季節だものでございますから、この潟へ水鳥を撃ちに。」

「ああ、銃^{しぎ}に——鴨^{かも}かい、鴨^{かも}かい。」

「はあ、鴨も鴨も居ますんですが、おもに鵜^{ぼん}をお撃ちになります。

——この間おいでになりました時などは、お二人で鵜^{いっそく}が、一^{いっ}百^{そく}二三十も取れましたね、猟袋に一杯、七つも持ってお帰りになりましたんですよ。このまだ陽^{あが}が上りません、霜のしらしらあけが

一番よく取れますって、それで、いま時分お着つきになります。」

「どこから来るんだね、遠方ツて。」

「名古屋の方でございますの。おともの人と、犬が三頭、今夜も大方そうなんでございましょうよ。ここでお支度をなさる中うちに、馴なれました船頭が参りますと、小船二艘そうでお出かけなさるんでございますわ。」

「それは……対あいて手は大紳士だ。」と客は歎息して怯おびえたように言つた。

「ええ、何ですか、貸座敷の御主人なんでございます。」

「貸座敷——女郎屋じよろやの亭主かい。おともはざつと幫たいこもち間まだな。」

「あ、当りました、旦那。」

と言ったが、軽く膝で手を拍つて、

「ほんに、辻占つじうらがよくつて、獵のお客様はお喜びでございませう。」

「お喜びかね。ふう成程——ああ大した勢いだね。おお、この静寂ずかな霜の湖を船で乱して、鴛鴦こだまが白山はくさんへドーンと響くと、寝ぬくまった目を覚して、蘆の間から美しい紅玉の陽の影を、黒水晶のような羽ちりばに鏤めようとする鶺鴒こたまが、一羽ばたりと落ちるんだ。血が、ぼたぼたと流れよう。犬の口へぐたりとはまって、水しぶきの中を、船へ倒れると、ニタニタと笑う貸座敷の亭主の袋へ納まるんだな。」

お澄は白い指しびを扱きつつ、うっかり聞いて顔を見た。

「——お澄さん、私は折入って姐さんねえにお願いが一つある。」
客は膝をきめて居直ったのである。

四

渠かれは稲田いなだ雪次郎せつじろうと言う——宿帳の上を更あらためて名を言った。画家である。いくたびも生しょう死しの境にさまよいながら、今年初めて：
：東京上野の展覧会——「姐さんは知っているか。」「ええこの
辺でも評判でございます。」——その上野の美術展覧会に入選し
た。

構図というのが、湖畔の霜の鷓なのである。——

「鵜は一生を通じての私のために恩人なんです。生命いのちの親とも思う恩人です。その大恩のある鵜の種類が、夫も妻も娘もせがれも、貸座敷の亭主と幫間の鉄砲を食くらつて、一いつとき時に、一いつそく百二三十ずつ、袋へ七つも詰込まれるんでは遣切やりきれない。——深更よふけに無理を言つてお酌をしてもらうのさえ、間違つている処へ、こんな馬鹿な、無法な、没常識な、お願いと言つちやあないけれど、頼むから、後生だから、お澄さん、姐さんの力で、私が居る……この朝だけ、その鵜撃うちを留めやさしてはもらえないだろうか。……男だてなら、あの木曾川の、で、留とめて見ると言つたつて、水の流ながれは留められるものではない。が、女の力だ。あなたの情なさけだ。——この瀉の水が一時凍らないとも、火にならないとも限らない。そこが御婦人

の力です。勿論まるきり、その人たちに留めさせる事の出来ない事は、解つて、あきらめなければならぬまでも、手筈を違へるなり、故障を入れるなり、せめて時間でも遅れさして、鷓鴣が明らかに夢からさめて、水鳥相当に、自衛の守備の整うようにして、一羽でも、獲ものの方が少く、鳥の助かる方が余計にしてもらいたい。——実は小松からここに流れるかけはしがわ 川で以前——雪間の白鷺を、船で射た友だちがあつて、……いままですらりと立つて遊んでいたのが、弾丸たまひびきの響と一所に姿が横に消えると、颯さつと血が流れたという……話を聞いた事があつて、それ一羽、私には他人の鷺でさえ、お澄さんのような女が殺されでもしたように、悚然ぞつとして震え上つた。——しかるに鷓鴣は恩人です。——姐さん、こ

れはお酌を強請ねだつたような料簡りようけんではありません。真人間が、真面目まじめに、師の前、両親の前、神仏の前で頼むのとおなじ心で云うんです。——私は孤児みなしごだが、かつて志を得たら、東京へ迎えます。と言ううちに、両親はなくなりました。その親たちの位牌いはいを、……上野の展覧会の今最中、故郷の寺の位牌堂から移して来たのが、あの、大な革靴おおきかばんの中に据えてあります。その前で、謹んで言うのです。——お位牌も、この姐さんに、どうぞお力をお添え下さい。」

と言つた。面おもてが白蟻はくろうのように色澄んで、伏目で聞入つたお澄の、長い睫毛まつげのまたたくとともに、床とこに置いた大革靴が、揺れて熊の動くように見えたのである。

「あら！ 私……」

この、もの淑しずかなお澄あわただが、慌あわただしく言葉を投げて立つた、と思うと、どかどかどかと階はしご子段だんを踏立てて、かかる夜陰はばかを憚はばからぬ、音が静寂しじま間に湧わきあが上あった。

「奥方は寢床で、お待ちで。それで、お出迎えがないといった寸法でげしよう。」

と下から上へ投掛けに肩へ浴びせたのは、旦那くだんに続いた件の幫うなず間まと頷うなずかれる。白い呼吸いきもほつほつと手に取るばかり、寒い声だが、生ぬるいことを言う。

「や、お澄——ここか、座敷は。」

扉ドアを開けた出會頭であいがしらに、爺おややが傍そばに、供つたが続いて突立つたった忘くつわ八

の紳士が、我がために髪を結つて化粧したお澄の姿に、満悦らしい鼻声を出した。が、きばや氣疾にくび頸からさきへ突込つっこむ目に、何と、ねや閨の枕に小ざかもり、びやく媚薬をほうふつ髻髻とさせた道具が並んで、なまじろ生白けた雪次郎が、しまのどてら広袖で、ほろよい微酔で、夜具にもた凭れていたろうではないか。

しょう正の肌身はそこで藻抜けて、ここにうつせみ空蟬の立つようなお澄は、いき呼吸も黒くなる、相撲取ほど肥つた紳士の、らっこえり臘虎襟のおおがいたう大外套の厚い煙に包まれた。

「いつもの上段の室までございますことよ。」

と、さすが客商売の、透かさず機嫌を取つて、ドア扉隣へ導くと、紳士の開閉あけたての乱暴さは、ドンドンシン、続けさまに扉が鳴つた。

五

「旦那だんなは——ははあ、奥方様と成程。……それから御入浴という、
 まずもつての御寸法。——そこでげす。……いえ、馬鹿でもその
 くらいな事は心得ておりますんで。……しかし御口ごこうちゆう中ぐらいに
 なさいませんと、これから飛道具を扱います。いえ、第一遠く離
 れていらつしやるで、奥方の方で御承知をなさいますまい。はは
 はは、御遠慮なくお先へ。……しかししてその上にゆっくりと。」
 階はしご子だん段あしづみに足踏して、

「鷓だよ、鷓だよ、お次の鷓だよ、晩の鷓だよ、月の鷓だよ、深よ

夜の鶺鴒だよ、トンと打つけてトントントンとサ、おっとそいつは水鶏だ、水鶏だ、トントントントン。」と下りて行く。

あとは、しばらく、隣座敷に、火鉢があるまいと思うほど寂寥した。が、お澄のしめやかな声が、何となく雪次郎の胸に響いた。

「黙れ！」

と梁から天井へ、つつぬけにドス声で、

「分った！　そうか。三晩つづけて、俺が鶺鴒撃に行つて怪我をした夢を見たか。そうか、分った。夢がどうした、そんな事は木片でもない。——俺が汝等の手で面へ溝泥を塗られたのは夢じゃないぞ。この赫と開けた大きな目を見ろい。——よくも汝、溝泥

を塗りおつたな。——聞えるか、聞えるか。となりの野郎には聞えまいが、このくらいな大声だ。われが耳は打ぬいたろう。どてツ腹へ響いたろう。」

「響いたがどうしたい。」と、雪次郎は鸚鵡がえしで、夜具に凭れて、両の肩を聳やかした。そして身構えた。

が、そのまま何もなくバツタリ留んだ。——聞け、時に、ピシリ、ピシリ、ピシヤリと肉を鞭打つ音が響く。チンチンチンチンと、微に鉄瓶の湯が沸るような音が交る。が、それでないと、湯気のけはいも、血汐が噴くよう^{ちしお}で、凄じい。

雪次郎はハツと立って、座敷の中を四五度廻った。——衝と露台へ出る、この片隅に二枚つづきの硝子を嵌めた板戸があつて、

青い幕が垂れている。晩方の心覚えには、すぐその向うが、おなじ、ここよりは広い露台で、座敷の障子が二三枚覗かれた——と思う。……そのまま忍寄つて、密そつとその幕を引ひきなぐりに絞ると、隣室の障子には硝子が嵌め込こみ込になつていたので、一面に映るように透いて見えた。ああ、顔は見えないが、お澄の色は、あの、姿見に映つた時とおなじであろう。真うつむけに背ののめつた手が腕のつけもとまで、露呈あらかわに白く捻上げられて、半身の光沢つやのある真綿をただ、ふつくりと踵かかとまで畳に裂いて、一ふたすじ一条引伸ばしたようにされている。——ずり落ちた帯の結むすびめ目を、みしと踏んで、片膝を胸腹へむずと乗掛のりかかつて、忘八くつわの紳士が、外套も脱がず、革帯を陰気に重く光らしたのが、鉄の火箸ひばしで、ため打ちにピシヤ

り打ちピシリと当てる。八寸釘を、横に打つようなこの拷掠ごうりやくに、ひツつる肌うねに青い筋の蜿うねるのさえ、紫色にのたうちつつも、お澄は声も立てず、呼吸いきさえせぬのである。

「ええ！ ずぶてえ阿魔あまだ。」

と、その鉄火かなひばし箸しを、今は突刺しそうに逆に取った。

この時、階段の下から登あしおと音が来なかつたら、雪次郎は、硝子を破つて、血だらけになつて飛込んだらう。

さままでの苦痛を堪こらえたな。——あとでお澄の片頬かほに、畳の目が鑢やすりのようについた。横顔で突つぶして歯をくいしばつたのである。

そして、そのくい込んだ畳の目に、あぶら汗あぶらあせにへばりついて、鬢びんのおくれ毛けが彫込んだようになっていた。その髪かみのひとすじ一条を、雪

次郎が引いてとつた時、「あ痛、」と声を上げたくらいであるから……

かくまでの苦痛を知らぬ顔で堪えた。——ほうかん 幫間が帰つてからは、いまの拷掠については、何の気色もしなかつたのである。

銃猟家のいいつけでお澄は茶漬の膳を調えに立つた。

ドア 扉から雪次郎が密そつと覗くと、中段の処で、ひじ 肱を硬直に、帯の下の腰おきを圧えて、片手をぐつたりと壁に立つて、倒れそうにうつむいた姿を見た。が、けはい 氣勢がしたか、ふいに真ま青あおな顔して見ると、寂しい微笑を投げて、すつと下りたのである。

隣室には、しばらくいやし賤しげに、浅ましい、売女商売の話が続いた。

「何をしてうせおる。——遅いなあ。」

二度まで爺やが出て来て、催促をされたあとで、お澄が膳を運んだらしい。

「何にもございません。——料理番がちよと休みましたものですから。」

「奈良漬、結構。……お弁当もこれが関でげすぜ、旦那。」

と、幫間が茶づけをすすする音、さらさらさら。スウーと歯ぜせりをしながら、

「天気は極上、大猫でげすぜ、旦那。」

「かどで首途に、くそ忌々いまいましい事があるんだ。どうだかなあ。さらけ

留やめて、一番新地で飲んだろうかと思うんだ。」

六

「あなた貴方、ちよつと……お話がございます。」

——弁当は帳場に出来ているそうだが、船頭の来ようが、また遅かった。——

「へい、旦那御機嫌よう。」と三人ばかり座敷へ出ると、……

「遅いじゃねえか。」とその御機嫌が大不機嫌。「先刻さつきお勝手へ

参りましただが、お澄さんが、まだ旦那方、御飯中で、失礼だと言わつしやるもので。」——「撃ぶつぞ。出る。ここから一発は

なしたるか。」と銃獵家が、怒りだちに立った時は、もう横雲が

たなびいて、湖の面おもてがほんのりと青ずんだ。月は水線に玉を沈めて、雪の晴れた白山に、薄紫の霧がかかったのである。

早いもので、湖に、小さい黒い点が二つばかり、霧を曳ひいて動いた。船である。

睡眠ねむりは覚めたらう。翼を鳴らせ、朝霜に、光あれ、力いのちあれ、寿ながかれ、鷓よ。

雪次郎は、しかし、青い顔して、露台に湖に面して、肩をしめて立っていた。

お澄が入って来た——が、すぐに顔が見られなかった。首筋の骨こわが硬こわばったのである。

「貴方、ちよつと……お話がございます。」

お澄しずかが静しずかにそう言いうと、からからと釣つりを手繰たつて、露台らうたいの硝子がら戸すどに、青い幕まくらを深く蔽おほうた。

閨ねやの障子しょうじはまだ暗くらい。

「何とも申しようがない。」

雪ゆきはどうとなつて手てを支たいた。

「私は懺悔ざんげをする、皆嘘うそだ。——画工えかきは画工えかきで、上野うえのの美術展覧会びじゆつてんらんかいに出いしは出いしたが、ままつたまくの処ところは落第らくだいしたんだ。自棄やけままぎれに飛出としたんで、両親りやうしんには勘当かんとはさされても、位牌いはいに面目めんもくのあるよような男おとこじやない。——その大革靴おおかばんも借かりものです。樊はん噲かいの盾たてだと言いつて、貸かした友ともだだちは笑わらつたが、ししかし、破やぶりも裂ひきも出い来き

ないので、そのなかにたたき込んである、鵜を画かいたのは事実です。女郎屋じよろやの亭主が名古屋くんだりから、電報で、片山津の戸を真夜中にあけさせた上に、お澄さんほどの女に、髪を結いわせ、化粧をさせて、給仕につかせて、供をつれて船を漕こがせて、湖の鵜を狙ねら撃いうちに撃つつて廻る。犬が三頭——三疋とも言わないで、皆さんが奴等やつらの口うつしに言うらしい、その三頭も癩しやくに障さつた。なにしろ、私の画えが突匆つっぱねられたように口惜くやしかった。嫉妬ねたみだ、それみだ、自棄じきなんです。——私は鵜になつたんだ。——鵜が命乞いのこいに来た、と思つて堪こらえてくれ、お澄さん、堪忍こらえしてくれたまえ。いまは、勘定があるばかりだ、ここの勘定に心配はないが、そのほかは何にもない。——無論、私が志を得たら……」

「貴方。」

とお澄がきつぱり言った。

「身を切られるより、貴方の前で、お恥かしい事ですが、親兄弟を養いますために、私はとうから、あの旦那のお世話になつておりますんです。それも棄て、身も棄てて、死ぬほどの思いをして、あなたのお言葉を貰きました。……あなたはここをお立ちになると、もうその時から、私なぞは、山の鳥です、野の薊あざみです。路みちば傍たの塵ちりなんです。見返りもなさいますまい。——いいえ、いいえ……それを承知で、……覚悟の上でしました事です。私は女が一生に一度と思う事をしました。貴方、私に御褒美を下さいまし。」

「その、その、その事だよ……実は。」

「いいえ、ほかのものは要りません。ただひとしな一品。」

「ただ一品。」

「貴方の小指を切つて下さい。」

「……………」

「澄に、小指を下さいますし。」

少からず不良性を帯びたらしいまでの若者が、わなわなと震えながら、

「親が、ふたおや両親があるんだよ。」

「私にもございますわ。」

と凜りんと言つた。

「こぶし拳を握って、きつ屹と見て、

「お澄さん、かみそり剃刀を持っているか。」

「はい。」

「いや、——くいき食切つてくれ、そのしらほ皓齒で。……潔くあなたに上げ

ます。」

やがて、唇にふくまれた時は、かえつておきなご稚児が乳を吸うよう

な思いがしたが、あとのいたみ疼痛は鋭かった。

かれ渠は大夜具を頭からひっかぶ引被った。

「看病をいたしますよ。」

お澄は、胸白く、下じめのほか他に血がにじ浸む。……しゆす繻子の帯がする

すると鳴った。

大正十二（一九二三）年一月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成」ちくま文庫、筑摩書房

1995（平成7）年12月4日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十二卷」岩波書店

1940（昭和15）年11月20日第1刷発行

入力：門田裕志

校正：今井忠夫

2003年8月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

鵠狩

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>